

## この街に冬が来ました。

加藤 佳奈子

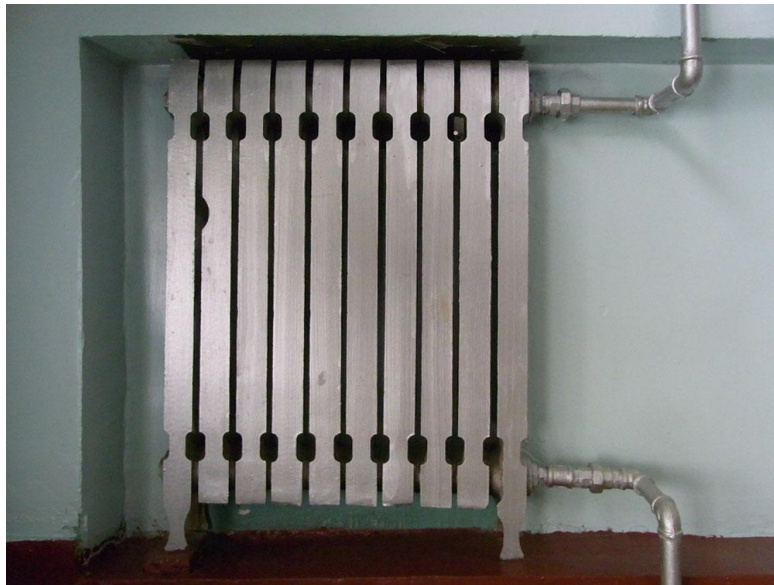
「太原の冬は寒い」とさんざんおどされていましたが、やはり11月になると冷え込みも格段に厳しくなり、各家庭内に取りつけられているセントラルヒーティングシステムが一斉に稼働をはじめます。これは日本でも見かけるオイルヒーターのようなもので、ゆっくり時間をかけて廻りの空気を暖めるので、石油ストーブやエアコンのような即効性はありませんが、冬の間は24時間つきっぱなしなので部屋の中はいつも暖かです。私は個人的にヒーターも購入したので、この2つを併用すればエアコンをつけなくても半袖で過ごすことができるくらいです。

さてそんな暖かい部屋の中とは対照的に、外は零下の日々が続いています。日の出はずいぶん遅く、午前7時を過ぎてようやく明るくなってくるといった具合です。昼間は青空が広がり気持ちがいいのですが、太陽が照っているにもかかわらず空気は冷たく、息の白さが目立ちます。そして夕方からの冷え込みで道端の水たまりは凍り、夜になると耳が痛いくらい冷え込んできます。乾燥した地域なので、晴れ間が多く日差しが暖かいのがすくいますが、これで曇っていたり風が吹いたりすると、文字通り身を切るような寒さに耐えなくてはなりません。先日初めて雪が降りましたが、そんな日はよほどのことがない限りは外へは出ず、部屋の中でのんびり勉強でもして過ごすのが得策です。

そんな寒さの中でも、11月の半ばに太原市内の有名なお寺へ行ってきました。このお寺は永祚寺といって、16世紀末～17世紀初頭の明代に建てられたものです。高さ50メートル程の大きな卒塔婆が2本立っているのが一般的には双塔寺と呼ばれています。冬季は訪れる人も少ないためか閑散とした雰囲気でしたが、そのためゆっくり見て廻ることができ、しかも入場料が10元でした。ちなみに冬季以外は一般30元、学生は15元です。今でこそ双塔寺は太原のランドマーク的な存在ですが、10年前には廃寺同然だったと地元の人には言っていました。比較的最近に改修されたようで、日本の古い社寺のような荘厳さはありませんでしたが、それでも当時の建築様式がところどころに残されていて古い時代の中国を肌で感じることができます。

特に興味深いのは寺の建材にレンガが多用されていることです。日本の社寺は木と漆喰、という印象ですが、たしかに耐用年数を考えればレンガで建てたほうがはるかに長持ちするでしょうし、なにより乾燥した土地では木材は水分不足で亀裂が入ってしまう恐れがあるのだそうです。日本ではレンガというと新しい素材のように感じますが、中国北方部では土を練って焼き固めるという製法は紀元前の春秋戦国時代からすでに導入されていたようで、やはり土地にはその土地にあった建築方法があるのだと感じました。また唐三彩のような緑

や茶褐色の釉薬がかかった屋根瓦も目を引いたので、家に帰って調べてみたところ、明の時代に明三彩（つまり唐三彩は唐の時代の三彩という技法のようです。）が山西省の南隣に位置する河南省を中心に生産・流通していたとのことで、その辺りの流行からおそらくこの明代に建立された寺にも三彩が装飾品として使われたんだらうと推測されます。他にも、なぜ仏塔が2棟も建っているのか（仏塔は卒塔婆の役割を果たしているのです、本来1寺につき仏塔1棟のはずです。）、どのような経緯でこの位置に建っているのか（風水の影響などはあったのか。）などなど、気になることがたくさんあります。また後のレポートに新しい発見の報告をできる機会があればいいと思います。



先述のセントラルヒーティングシステム。  
これは学生寮階段の踊り場のもの。



双塔寺は高台に建てられているので、  
仏塔に登れば市街が一望できます。



双塔寺の一部。壁はレンガ造り、屋根は三彩の瓦で葺かれています。



鉄道の車窓から。  
太原から30分も離れると壮大な乾燥高原地帯が現れます。